
診殺医・霧崎ひかる

半平太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

診殺医・霧崎ひかる

【Nコード】

N0294H

【作者名】

半平太

【あらすじ】

薄暗いレストラン。語らう男と闇色の美女。彼女の名前は霧崎ひかる。目の前の御馳走に、男は何を思い、何を見ることとなるのか。社会の影に潜むものを斬り裂く、ショートホラー。1話完結式で続けていこうと思います。

今夜はなんてついているんだ。目の前の血も滴るようなレアステークと、向かいに座っている美女。佐竹はそう思わずにはいられなかった。

「お気に召して？」

綺麗に切りそろえられた黒髪をそよがせ、少し低めの甘い声で女は尋ねた。

「あ、ええ、そりゃあもちろん！ ひかるちゃん、って云ったっけ？ 君みたいな綺麗なコに誘ってもらえて、そのうえこんな御馳走まで頂けるなんて、夢じゃないかな・・・もう、食べていい？」

彼女がうなずくより早く、佐竹は料理に齧りついた。のどに詰め込むような勢いで500グラムはありそうな肉の塊をたいらげていく。「脂がうまく乗った黒毛牛のフィレ肉。九州産かなあ？これ以上のものはそうそうないよ。こう見えても僕は食品会社に勤めているからね、そのへん詳しくてね。それにソースが絶品だよ。何か特別なハーブを使っているのかな？ どんどん食欲が湧いてくる感じだ。」

出会い系サイトなんてたかがしれていると思っていたが、こんなに上玉があっさり釣れるなんて。ナンパやテレクラよりはるかに率がいいな、佐竹は心の中でも舌舐めずりをした。肉と一緒に食べたがるなんて、初めから親密になりたがっているんだ・・・躊躇なく彼はそう考えた。

シンプルな黒のワンピースに白の薄手の上着をかけただけの無造

作なファッションだが、少しはだけた胸元や腕からも引き締まった美しい肉体が見てとれる。黒く輝く瞳には何もかも読みとられそうだ。沸き上がる劣情を悟られまいと、料理をさらに勢い良く片付けていった。

「よかつたら、こちらもいかが。」

ひかるは満足そう微笑むと、料理には手を出さず、煙草を取り出した。

（料理の邪魔だな）

佐竹は煙を露骨に嫌がったが、料理を目の前に差し出しされると、途端に上機嫌になった。

「えっ？ いいのかい？ じゃあ遠慮なく。いやあ、ホントに美味しい肉だな。ベジタリアンを気取る連中の気が知れないよ。人の血肉を作るのは、やっぱり肉だよ。それも上等な。」

「もつと上等なお肉を知らない？」

吸いかけのメントールの煙草を灰皿でもみ消すと、ゆっくりと立ち上がり、彼女は言った。

「あ？」

咀嚼しながら、だらしなく彼は聞き返した。

「あなたが欲しがっているのはこんな『お肉』じゃないはずよ。」

何をこの女は云っているのだろう。俺の気持ちを見抜いているのか。考えるより先に口が動いた。

「そ、そりゃあ、き、君の肢体のほうか、よほどうまそうダ・・・」

君だってそういう刺激的な出会いが欲しかったんだろう？ その白く透き通るような肌といい、膨らみといい、ほ、ホントウに食べてしまいたいヨ。」

（誘ってやがる・・・。）

佐竹の目は欲望に赤く濁っていた。咀嚼しながら、涎が垂れるのを手の甲で拭いた。顔も赤らみ、汗も流れ出す。刈り上げられた頭に

手を当て、ようやく違和感に気付いた。

(俺、髪、切ったっけ?)

額より上のあたりにしこりがある。ゆっくりなぞってみると、堅い紐のようだ。これはいつたい、何だ? 考えられるのは、新しい切開手術の跡。ここはなんて店だ?

何より、自分はいつから食べている?

「あなたが欲しがっているのは」

出し抜けに佐竹はナイフとフォークを逆手に持ち直し、ひかるに襲い掛かった。女の言葉に魔法でも掛かっているのか、もう気持ちも体も抑えることは出来ない。

「ちくしょう、喰いてえ、喰いてえ……。その唇も、脚も、胸も。レバーも、し、心臓もだ!」

荒い息とともに己が思いを吐き出し、目の美しい生け贄は引き裂かれる……。はずだった。

いつも彼がしていたように。しかし、その手はひかるには届かなかった。軽い麻痺感が脚を捕らえる。

「局部麻酔の影響よ。じきにそれは治るわ。あ、それから、あなたの厄介な病気も、もうすぐ自浄作用により完治される予定。」

食べかけの料理に突っ伏したまま、佐竹はまさに食い付かんばかりの形相で叫んだ。

「てめえ、どういっつもりだあ? お、俺はどこも病気じゃあねえし、医者を頼んだ覚えもね、ねえぞ!」

彼女は動じず、カルテらしきものを取り出してみせた。

「患者は別。ある富豪の夫婦で、あなたは『クランケの患部』の間違わないでね。私のいる病院……。『裏医死会』の会長から“診殺”の依頼が来たのよ。」

幼い娘を殺され、そのうえ遺体の一部を切り取り食べられたという
猟奇殺人事件が3年前に起こった。ところが犯人は当時未成年であ
り、精神鑑定の結果も『異常あり』と診断され、無罪となった・・・
。親としては納得いかないでしょうね。」

ゆっくりとした口調で彼女は『病状』を読み続ける。
「しかしその男は精神病院を脱出し、行方不明となった。名前を変
え、潜伏し、どうやら同様の事件を起こしているらしい、とのこと。
そしてあなたが見つかった・・・。

一番有効的に患者夫婦の心を癒し、患部を潰すのが私たち“闇の
診殺医”のお仕事で、最適な療法がこの御食事なわけ。」

佐竹と名のついていた男は、もはや理性のかけらもなく、震え、うな
り声をあげていた。彼女の言葉も届いているとも思えない。

「ここまでの記憶が曖昧なのは当然よ。前頭葉に簡単なロボトミー
手術をしておきました。それから食欲を司る中枢神経の調整と特殊
強心剤の投与。あなたは食べたいものを際限なく食べ続けなければ
ならなくなります。どんな時でも、ね。」

口元を拭い、診殺医と名乗った美女はルージユを塗り直す。深紅の
口紅が再び開く。

「このレストランは御夫婦があなたのために設えたのよ。廃虚のビ
ルを改造して。うまく“残った御馳走”を喰い繋いで生き延びれば
誰かが発見してくれるかも、ね。それじゃあ、御馳走様。」

冷たいメスのような微笑みを浮かべ、闇色の女医、霧崎きりさきひかるは
テーブルを離れ、出口に向かった。見渡せば周りは鉄格子をはめた
窓が一つ在るだけ。まるで牢獄のよう。

「て、てめえ待て、・・・あ、おなががすいたなあ・・・。喰わせる
ヨお、喰いてえよお、お肉が喰いたいんだああああ！」

男は、やっとの思いでひかるの消えた方向のドアまではいずり、
そこを開けた。はたしてその奥には、頑丈にロックされたもう一つ

の出口と、赤いビロウドの布に覆われたつい立てのような物があるだけだった。

かりそめの飢餓のサインにぎりぎりと言が痛む。何でもいい、喰いたい、喰わせてくれ。絶望と恐怖と食欲だけが薄汚れた食人鬼を襲う。

「ふらふらと立ち上がり、赤い布を取り払うと、“それ”には、真紅のルージュで言葉が書かれていた。

『menu』・・・メニュー、と。

彼は理性を失いかけた眼で、その大きなメニューに映っているものを見た。

たつぷりと、栄養をとった、ポリウム満点の肉の塊だけが、一枚の姿見には映っていた。

・・・診殺医 霧崎ひかる

karute - 1 「肉」 終わり。

karute-1 「肉」(後書き)

拙い小説?をお読み頂きありがとうございました。

本作はけっこう昔に書いたものを再び推敲修正したものです。

別作「ちよつと怖い小咄」でもけっこう怖い作品のほうが比較
読まれているようなので、今回直球(暴球?)で行きましたが…
どうでしょう?)(^^;:

良ければ感想などいただければ、幸いです。

ぷうんと、饅えた臭いがする。それから食欲をくすぐる甘い香り、香ばしいにおい。中堅製菓会社に勤める高須三平太は大量の汗をかきつつ、ひとり休憩室で悩んでいた。チョコレートを食べ、ビスケットを頬張り、それをアイスココアで流し込みながら。

「うーん、痩せなくちゃなあ。」
上司である営業課長に現在の体重を半減させなければリストラすると告げられたからだ。

「でも運動は大変だし、薬は苦いし…」
食事制限は はじめから考えていない。悩む間も自社製品を己の口に運ぶのを忘れない彼であった。

帰宅途中、三平太はいつものバイキングレストランでおよそ5人分の食料を摂取した。店員が迷惑そうな、苦笑いの表情で礼を言う。少し繁華街を歩くと、見慣れない看板が古いビルの端にある。看板を読むと…

<霧崎美容外科 瘦身手術 モニター募集>

とある。

「ああ、この手があつたかあ。こりや楽だ〜」
躊躇なく三平太は古臭いビルの扉を叩いた。

「…はい、手術終了。包帯と絆創膏は明朝には取れます。あとはレポートを出していただければいいわ。」
スレンダーだがめりはりのある容姿が白衣に見え隠れする。女医は手術の片付けをしながら言った。

「あのお、ホントにもう終わり？ ホントにお金も掛かないの？」

麻酔でまだ朦朧とした頭で三平太は目の前の美女に訊ねた。何をされたのか、それすらわからないが、心もち体が軽くなった気もする。しかし無料とは、あまりに都合が良すぎる。

「ええ、あくまでも新技術の痩身のチエックが目的ですから。ただ再手術は行えませんが、リバンドには注意して下さいね。あなたが日々の努力を行うか、その容姿に自信を持っていれば、問題はないけど。そうでけりゃ、あとで綻びがでるわ。覚えておくことね」薄暗がりの診殺室、女医はささやくよう言った。

「う、うん。わかった…」
ぞつとするような微笑を浮かべ、闇色の女医は大柄なクランケを見送った。

次の日。出社した三平太を見て、社員全員が朝茶を噴出し、卒倒し、絶叫した。

体積が半減したと言ってもいいだろう。少しだけふくよかな三平太がそこにはいた。

「き、ききき君、ホントに高須君か？ んな馬鹿な、いやでもその顔はしかし」

課長も脂汗を流し、さわやかに笑う男に質問した。

「ははは、やだなあ、僕に決まってるじゃないっすか。…これですトラ、ないですよね？」

コロンの香りがする。三平太はにんまりと笑った。汗ひとつかかずに。

高須三平太はダイエットに成功した。他の男の驚きと羨望の目、女達の憧れの眼差し。身も心も軽ければ仕事も対人関係もはかどる。彼は社の内外を問わず人気者となった。

そんな中、ひとり三平太を睨む目が在った。
課長である。

彼を切らねば自分が飛ばされる。課長は執拗に体重がきつちり半減していないことをつつき、毎日のようにねちねちと愚痴を言った。

辟易しつつも、三平太はまた例の美容整形外科に行こうと企んでいた。金さえ出せば、また痩身整形をしてくれるに違いない。あれから一ヶ月。実のところ暴饮暴食がたり、またまた全身にぽつぽつと肉が付いてきたのだ。憧れの目で見ていた女子社員も、いつの間にか値踏みするようになっていた。

彼はまた飲食街の外れの古ビルへ向かった。

「ま、しょうがないわね。綻んだら、今度は自分でなんとかして頂戴。私もそろそろ本業に戻らないといけないから……。」
薄明かりから女医の顔が見えた。氷のような、ぞつとする微笑を浮かべた美女だ。

「え、ええまあ。」

三平太はあいまいに返事をして、手術室へ向かった。

翌日。

ふたたび彼は変わった。よりスリムになり、肌には余分なたるみは見つからない。顔つきまで変わった。しわもない、精悍なマスク。目も切れ長になり、口も大きめだが薄い唇がセクシーだ。高須三平太は全女子社員の憧れの的に返り咲いた。

「高須さんて、少し見ないうちにすごく素敵になったわ。いったいどうして?」

「ふふふ、秘密だよ」

ほどなく、彼は会社一の美女を自宅まで連れ込んだ。何をするのも自由だ。彼女は自分の顔を見、体に触れるだけで満足なのだ。

明け方。満足げに眠る三平太の後姿に、女は擦り寄った。彼の首

karute2「汗」終わり。

・・・診殺医
霧崎ひかる

1 .

昼でも日の当たらない雑居ビルの一室、看板もないうさん臭い店が並ぶその中に、「霧崎眼科きりさき」とドアに書かれた一室があった。そこにやって来たひとりの女。流行のファッション、手入れされた巻き毛の長髪。美しいが整い過ぎた、年齢の読めない顔。それは表情もなくさながら人形のように。

「…どなたか、いませんか？」

女が部屋に入る。部屋はさらに暗く、チューンの外れたラジオの二ユースが聞こえる。

歓楽街に起る通り魔事件、美少女たちの顔を切りつけられる…そんな物騒な話題ばかりが。

奥から涼やかな声が響いた。

「いらつしゃい。よくこの病院にたどり着いたわね。」

まるで客が来るのが不思議だ、とでも言いたげだ。陶磁のような肌、整った顔立ち、神秘的な黒瞳。黒のスーツに白衣をかけたラフないでたち。相対する女とまた別に現実感が乏しくなるほどの美貌である。しかし圧倒的な瞳の奥の光…意志の強さが見える。そんな女医に羨望とも敵意ともとれる視線を投げ、女は言った。

「…きれいに、なりたいの」

「なに言ってるのかしら？　ここは眼科。美容外科じゃ……」
ない、そう言おうとした霧崎の言葉を遮るように女は話を切り出す。
切実な口調だが、表情は変わらない。

「私、整形手術は何度が受けています。初めて整形した時は皆が私を振り返り、賛美　し求愛してくれたわ。私、幸せだった……でも、それも束の間のこと。どんなに顔を整形しても美の基点は移り変わり、飽きられ、疎まれていくの。一番の美人にはなれないのよ！」
青白い顔で吐き捨てるように言う。

「そう、それで何度も整形を繰り返して……でも、そんなの気にしていたらノイローゼになるわよ。粘土細工じゃないんだから、整形のし過ぎはよくないわ。顔の神経が硬直気味だし、若干顔面神経痛も入っているわね。とにかくくしわの一つもない顔なんて」

「いやッ！　わ、私は綺麗でいたい、皆がうらやむ美貌でなければイヤなのよ！　これ以上整形できないなら、他の女性の美しい顔を見るくらいなら……いっそ、この目を潰してほしいわ……」

錯乱する女。手をカバンに差し込み、何かを取り出そうとしては、自らそれを制する。

「ふうん。それで目の手術を？　さすがにそれは勘弁だわ。」

（実験も出来ないし、ね）

小さな声で、闇色の女医はつぶやいた。

「確かにその顔はもういじりようがないわ。どこかの歌手のように崩壊しかなないでしょうし。　なら、あなたより美しい顔が見えなくなれば、良いのね？」

眼科医の黒い瞳が、残酷に輝いた。

「ええ、お金ならいくらでも出すわ。どうせ馬鹿な男たちに貢がせた金がいくらでもあるし。こ、このままじゃ、私、また何をするか……先生、あなたのような綺麗な顔を……切り刻んでやりたい……！」

わなわなと手が震え、女の瞳に闇の濃さが増す。女がカバンに隠し

持った何かを持ち出そうとした。鈍く光る銀色のそれは、鋭利な刃物のようだ。しかしその手の動きはぴたりと止まった。強烈な睡魔が女を襲う。

「承知しました。改めまして、担当します霧崎ひかるです。あなたがここに来れたのはあなたに歪みがあったため。社会に歪みがあったため。そういう歪みを正すが私のような“診殺医”の努め。きつとあなたが、社会が認める成果をあげてみせますわ。たとえ少々強引でも、ね。」

「あ、ああ……」

ひかるの手にはいつの間にかスプレー缶があった。催眠ガスにまどろむ女に霧崎は艶然とほほ笑み、ゆっくりと歩み寄っていった。

3 .

「はい、術式、終了。2〜3時間で包帯は取れるわ。」

「そ、そんなに早く?」

術後。手術台から起き上がった女は霧崎の声のする方向へ問い尋ねた。不安がる彼女に、闇色の女医は手を握り優しく答えるのであった。

「親切、スピーデイが売りなの、ここ」

そして時は経ち包帯は解かれ、恐る恐る目を開く。女が見たのは

：

「うっ」

少し離れた暗がりから、ガマガエルのように歪んだ顔の女医が眼前に現れた。

「ふふ、とんでもない物を見たって顔ね」

近づくにつれ、顔の歪みが戻り、霧崎の端正な顔となった。

「ど、どういうこと？」

「眼球の屈折率とピントを調整しました。それから、脳の一部に繋がる神経も」

「神経って…それに今の、なんなの？ あなた顔が」

「世の中にはいろんな奇病があつて、人の顔を認識できない、という症状があるの。疑似的にそれに近い状態が再現出来るようにしてみたわ。魚眼レンズを逆さまにしたように遠目に写る人の顔だけが歪み、近付けばそれは普通に見える、というわけ。」

なるほど、霧崎が後ずさりすると、顔はまた醜く歪んでいった。

「本当に信頼出来る人や顔の美醜を気にしない人以外は近寄せなければ、あなたの周りには醜い人間しかいなくなるわ」

「ほ、ほんとう？ ああ、すてき…夢のようだわ」

女ははじめて堅い笑顔らしきものを見せた。

費用を聞く女に、術後の経過だけ知らせてくれれば良いという闇色の女医。女は礼もそこそこに、眼科を後にした。

4 .

深夜のホテルで。

「いや、来ないで！ あなただつてガマガエルのくせに！」

「なんだよ、ケツ。お高くとまってよ、性格ブス！」

手術を受けた美女だ。汚いものを見る目で男をにらみ、部屋を出て行く。

手術の後、女は人との付き合いを以前より極端に避けるようになった。遠めに人の顔を見てはほくそ笑む女に、彼女に恋慕していた男たちも、友人も、怒り気味悪がつて離れ始めた。

(どんなに醜態をさらしても、あの醜い奴らよりは何万倍も私は美しいわ…)

傲慢さが彼女自身の立ち振る舞いや身なりを、心身の醜さすらを助長させる。

そして。

ずる、ぺたり。

「お、おい。あの女」

「し、目を合わすなよ」

ずる、ずる、ぺたり。

「ああなっっちゃあねえ…」

薄暗い街明かりの夕べ。前かがみに体を歪め、のろのろと裸足で徘徊する女がそこにはいた。髪もぼさぼさに乱れ、服装も肌の手入れもおざなりだ。ぶつぶつと独り言を言い、時折り獲物を狙うかのように、濁った目で他人の顔を覗き込んで悦に入る表情を見せる。

「ぐえええええっ、げっげっげ」

それは、

ガマガエルのようだった。

「彼女自身は、お幸せのようね。さよなら、世界一の美女さん」

雑居ビルの窓から女を眺めていた闇の診殺医は、静かに窓を閉じた。街頭のニュースは“美女ばかりを狙った通り魔事件”の犯行がばったりと止んだ事を伝えている。

夕闇は落ち、窓もビルも闇の中に、消えていった。

k a r u t e - 3 「目
「

終わり。

・
・
診殺医
霧崎ひかる

karute - 4 「腕」

診殺医 霧崎ひかる

karute - 4 腕

1 .

「お、お願いです。彼女を助けてください！」

そう叫び、蒼白な顔で青年は部屋に入ってきた。肩まで伸ばした茶髪、端正な輪郭に涼しげな目元。品のよさそうな白いシャツを…
赤く血で汚して。

「あら、急患かしら。よくここまで来れたこと」

薄暗がりの部屋で、女医は囁くように言った。妖艶に微笑む真紅の唇。ドアには「霧崎形成外科」、と書かれている。シンプルな黒のワンピースに白衣を無造作にかけている。深めに切れた胸元や腕からも引き締まった美しい陶磁のような肉体が見てとれる。
なびく長髪。黒く輝く瞳。

「ふうん。それで、彼女って…それ？」

「な、なに言ってるんですか。もちろんですよ。彼女以外に誰がいるんです！」

神経質そうに眉を吊り上げ男は叫ぶ。彼がかき抱いているのは

引きちぎられた、白い、女性の右腕だった。

「本当は、ちぎれた身体のほうにする応急処置なんだけど」

そう言いながら美しき女医は腕の断面を縫い治療を施した。傷口はみるみるうちになくなったかに見えた。水槽のような透明な箱に入れる。何かしらの培養液に浸かり、ゆっくりと沈む白く艶かしい右腕。それは何か別の生き物のようにも見える。

「すごい、神技だ…。あ、ありがとうございます。その、そう、この先で大型トレーラーにマナミは轢かれてしまつて…体はもうポロポロでした。せめて腕だけでも、生き残ってくれたら。いや、彼女の腕は 美しく、本人も自慢していました。この腕こそ、彼女自身なんです！」

北大路と名乗る青年は整つた顔を歪め、女医に詰め寄つた。

「ふうん…執刀医の霧崎ひかるといいます。患者に繋ぐ処理じゃなく、いいのね。なら…」

「あなたが望むなら、”彼女”を助けることも、出来るわよ。つまり、人工血液や薬液を循環させ、腕だけで生命機能を維持させることも、フフフ、とても倫理上はお勧めできないけれど。」

男の目がぎらつき、女医の黒い瞳を見る。

「ええ、ぜひ！ お願いします。彼女もそれを望んでいるはずだ…僕たちは相思相愛だから…」

「わかつたわ。 私は”闇の診殺医”。世にとつての悪しき患部をえぐり取り、治癒するのが生業なりわい。でも覚えておいて。偽りの依頼なら、いつかそれ相応の報いがあることを。」

数日後。青年の住まいだろうか。広々としたマンションの一室、しかし窓にはどこもカーテンやシャッターが閉じられ、目張りがい

てあり、光は差してこない。昼も夜もない世界。中央には…水槽に浮かぶ美しい右腕があった。

「ただいま。帰ってきたよ、マナミ。寂しかったろう?」

腕に語りかける北大路。水槽から青白い腕を取り出し、濡れるのもかまわず抱き寄せる。

うっとり和白い指を見つめ、己の指を絡めた。

「今日はマニキュアを買ってきたよ。君の好きな赤だ。血のような真っ赤だ」

ほほ笑みながら、北大路はつぶやいた。

3 .

< 行方不明の女性、轢死体で発見さる >

< 監禁か? 虐待の痕跡も >

< 未だ右腕は見つからず >

診察室で。新聞の事件欄を眺める霧崎のところに、顔面蒼白になり、髪を振り乱し、北大路が現れた。

「うん、どうしたの? 保存液と人工血液の交換はまだのはずだけど」

「せ、先生、マナミは、…本当に生きているんじゃないですか?」

「何を言ってるの? それを望んだのはあなたでしょ」

霧崎は悪戯っぽく笑う。

「今朝、水槽を見るとマナミ…マナミの腕がドアの近くまで飛び出していたんです。どう見ても自分で動いたとは思えない。ま、また逃げ出すつもりなのか…」

「あら。相思相愛じゃ、なかったのかしら」

男は激昂した。

「当たり前だ! 美しく完璧な僕に愛されて、逃げようとする、はずがないッ　こ、今度こそ、マナミは僕の言うことだけを聞

く存在になつたはずなんだ。」

豹変した態度にも霧崎は動じない。

「逃げようとか。極度の強迫観念から、腕を生きているように思い込み、自作自演で腕を移動させたんじゃないかしら。」

女医の問いも耳に届いているかどうか。

「さ、最近耳に響くんだ。キチキチ、って床を引つ掻く音が。前にも聞いた音だ。マナミが僕の言うことを聞かないんで”躑”をする、彼女は足を痛めつけても手だけでも這って僕から逃れようとするんだ。キチキチ、キチユリ、って。い、いくら爪が折れるから、と言つてもやめないんだ…！」

青年は独白を続けた。女医は立ち上がる。

「私にも臓器や身体の部位の保管や一時的な延命はできても、まさか腕に知能を持たせることは出来ないわ。…ただ」

女医の闇色の目が残忍に光る。

「“生きている”ってことはどういうことかしら？ 意識があるってことなのか、もっとスピリチュアルなことなのか。昔は心臓が心や魂のある場所、と考えられていたわ。もしかすると臓器や手足にだつて心があるのかもしれない。腕にだつて、魂が宿っているかもしれないわ。憎しみを抱いて、復讐するかもしれない…」

わざわざ北大路の後ろにまわり、自分の白い二の腕を彼の首に絡ませてみせた。

「ヒイツ！」

北大路は叫び、”診殺室”を飛び出した。

「監禁、暴行事件の常習犯、北大路の治療と診察、最終段階…フフ」
闇の診殺医は黒いカルテに記述し、何事もなかったかのようにそれを閉じた。

赤いスポーツカーが勢いよくマンションの車庫に入る。北大路の車だ。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

マンションに戻った北大路は赤いマニキュアを塗った腕を水槽から取り出した。

「マナミ、お、お前……」

そして、床を見ると

「うわああああッッ！」

フローリングの床には爪の掻き傷、そしてマニキュアで字らしきものが書かれていた。

イタイ コロサレル ニゲタイ ウデガ ニクイ シ
ニタイ

コ ロ シ テ ヤ ル

「あ、あああ」

冷たい汗がどつと吹き出る。生々しいその腕に今さらながら恐怖を憶え、その血管がぴくりと動いたと同時に、彼は腕を部屋の奥へ放り投げた。ごとりと腕は床にぶつかり、その反動が、「キチッ」と床を掻く仕種をした。

ボタン！

外に出て部屋の鍵を閉める。半狂乱になった男の耳に、ドア越しに微かな音が聞こえる。

キチ、キチ、キチチ・・・

きちゆり、きちゆり、きちゆりきちゆり・・・

きちゆりきちゆりきちゆりきちゆりきちゆりきちゆりきちゆり

「ひ、ひい、ゆ、許してくれ、マナミ！」

北大路は再びスポーツカーに飛び乗り、深夜の道路を暴走した。

「あ、あれはマナミなんかじゃない。そ、そうだ、他の美しい腕を、女を探すんだ。僕の言うことを聞く、ぼ、僕だけの奴隷を……」

きち。

車外から、乾いた音が響く。

「な！ な、なんで！」

アクセルを踏み込む。スピードは増すが、その音は付いてくる。

きち、きち、きち、キチキチキチチチチチチ……

「ぎゃあああああつ……」

翌朝。

朝もやの中、パトカーが走る。交通事故の通報を受け、現場に向かう途中である。

キチキチ、と乾いた音がする。

「ああ、またタイヤの溝に小石が挟まったな」

「嫌ですよねえ、この音。車輪が回転するたびに道路と擦れるものだから、車の速さに合わせて鳴るし。まるで追いかけているみたいだ。」

若い警官がぼやいた。

キチ、キチ、キチチ。

二人は現場に到着し、検証を始めた。

「夜にライトも点けず、暴走、自爆か。」

「うわ、車もそうだけど、中の男も…グチャグチャだ」

「ひどいな…うん？ 右手だけはきれいだな。」

「でも、なんだか痣がありますよ。五本の、指で、締めたみたいな」
二人は顔を見合わせ、気色ばんだ。

反対車線のやじ馬の中で白衣の美女がそれを見ている。診殺医は
メスのように冷たい笑みを浮かべると、無言で去っていった。

・・・診殺医 霧崎ひかる

karute - 4 「腕」 終わり。

karute - 4 「腕」 (後書き)

ここまで読んで下さった皆様、どうもありがとうございました。

1話完結式に始めた拙作も今回で一応の終了とさせていただきます。
よかつたら感想批評、お聞かせ下さいませませ。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0294h/>

診殺医・霧崎ひかる

2010年10月21日22時37分発行